

# 表象の強度に就いて

大 脇 義 一

表象の強度 intensity が特に問題とせられたのはテイチナーに於てである。テイチナーは感覺の屬性なるものをば師ヴントよりも更に一層徹底的に攻究し、<sup>①</sup>引いて是と平行的に表象の屬性にまで歩を進め、一九〇八、九年頃その門下生フリース・シャウプをしてこの問題を實驗的に研究せしめたのであつた。<sup>②</sup>

然しながら表象の強度は決してかやうな事情からして始めて提出さるゝに至つた比較的新しい問題であるのではなく、表象に關する諸問題の内でも實は最も歴史的なるものゝ一に屬する。それは少くとも既にヒューム Hume, D. (一七三八)<sup>③</sup> 以來の主題であることは確かである。思ふに知覺内容又は感覺に對する表象の別は先づ差當り強度を標識として對立せしめられ、判別せられるからであらう。

是の如く表象の強度は近世哲學史上の一主題であつたと共に、又、ヴント Wundt, W.、スタウト Stout, G. F.、ゲ・エ・ミユラー Müller, G. E.、ティチナー Titchener, E. B.、チーヘン Ziehen, Th.、キルペ Kälpe, O.、ホルドシュタイン Goldstein, K.、コンラーテ Conrad, Th.、シフトラング Stumpf, C.、ブローラー Bleuler, E.、リント

ヴォルスキー Lindworsky, J.、フィッシャー Fischer, S. 等の互に甲論乙駁して今日未だ解決されない現代心理學の大問題の一に屬する。筆者がこゝにこの難問題を探り上げて考察するのは敢てこの問題を自ら一舉に解決しやうなどといふ意圖に發するのではない。唯だ筆者はこの問題を廻る幾多の思想家の主張を閲することによつて表象なる體驗を如何に彼等が考察し把握してゐるかといふことを確め、相反する主張の根據たる觀察事實に誤は無いか、或は或る特別の條件に制約された觀察事實からする不當な一般化が行はれてゐるのではないか、實驗的研究に基く結論乃至推定に方法の不備や、獨斷や論理の飛躍が無いであらうかを檢し、かくすることによつて表象體驗を一層正確に認識し、同時に表象の強度の問題を一步でも解決の地點に近づかせることが可能ではあるまいかと考へるからである。

さて表象の強度の問題は是を三段の論點に分けて吟味して行かねばならないであらうと思ふ。

その第一は表象には知覺内容に於ける如き強度の別が存するかどうかといふ問題である。

第二はこの第一の問題が肯定されて始めて起り得る問題であるが、それは若し表象に強度なる屬性が具備されてゐるとすればその強度は感覺の強度と全く同一の性質のものであるか。表象の強度と感覺の強度とはその意味を同ふするものであるか。表象の強度と感覺の強度とは互に比較し得べきものであるかといふ問題である。この問題に對しても様々の見解が採られるであらう。

第三の問題は又第二の問題が肯定的に答へられた場合にのみ起り得るものであつて、若し第一の問題が肯定せられ、表象の持つ強度の別が知覺内容の持つ強度の別と同性質であると認めることが出來るとすれば、次に起る問題は然ら

ば兩者は相互に如何なる關係に立つかといことである。表象の強度は知覺内容の其に對して如何なる關係を持つかの問題である。

知覺内容の強度と表象の強度との間の關係を論ずる學者等は上述のやうな三の論點を殆ど區別してはゐないのである。特に第一の問題の如きは深く問題とすることなしに殆ど無意識的に肯定してしまつて、いきなり第二の問題、甚しきは第三の問題を取扱つてゐる。然しながらこの強度の問題を根本的に考察せむが爲には上述のやうな三の問題を區別して置いて順々にこの問題に照會しながらその見解を明かにするべきであらう。

## 二

そこで先づ第一の問題たる表象には強度があるかどうかといふ問題の考察から出發しよう。

今日吾々の意味する表象に相當する *ideas* をば同じく吾々の現今意味する知覺内容乃至感覺(尤も感情なども含んでゐるが)に相當する *impressions* から區別して、而もその標識をそれらが吾々の心を打つ強さの差違に求めたのはヒュームであることは人の知るところである。彼は *A Treatise of Human Nature* の第一篇第二部の劈頭に言ふ<sup>①</sup>。

「人間の心のあらゆる *perceptions* (知覺ではなく意識内容一般の意) は二の異なる種類に分れる。それらを自分は *impressions* と *ideas* と呼ぶであらう。兩者の差違はそれらが吾々の心を打ち、吾々の思想又は意識の中へ入つて行く力と生氣 *force and liveliness* の程度に存する。多くの力と激しきで以て入り込む *perceptions* を *impressions*

と名づけてよからう。この impressions なる名稱の下に自分は心に始めて現はれる凡ての吾々の感覺、情熱、情熱 passions 及び情緒を意味する。Ideas とはそれら impressions の、思惟及び推理に於ける弱い像 faint image を意味する、例へばこの議論によつて喚起されるあらゆる知覺の如き是である、唯だ視覺と觸覺から起る知覺を除外して、それから起るかも知れない直接の快感又は不安を除外して。」

この ヒュームの force and likeness なる言葉の意味は今日吾々の言ふ單なる強度だけではなく、その上に necessity, vividness、ドイツ語の所謂 Einfringlichkeit なる性質が含まれてゐると唱へるスタウトやワード等の解釋もあるが、兎に角強度の大小によつて感覺と表象を區別することはヒューム以後現今の心理學者に至るまで殆ど普通自明の事柄として認められてゐることは明かである。

この強さの程度によつて知覺内容と表象とを分つことは言ふまでもなく彼等が知覺内容のみならず表象にも同種の強度の存在を認めてゐるからである。そうでなければ強度に就いて表象をば知覺内容と比較對照することは意味をなさない。

ヒュームは前に述べたやうに一方で印象 impressions (感覺 sensations, 情熱、情緒 passions and emotions) と表象 ideas との吾々の心を打つ力と生氣に於ける差違を認めてゐるが、他方では兩者が質的關係に於ては甚だ相似てゐることを高調する。<sup>⑦</sup>更に彼は兩者の間の因果的關係を考察し、いつも印象の方が時間的に前であつて表象はその後に起るのである。吾々の凡ての單純表象 simple ideas はその最初の出現に於ては對應する單純印象 simple impressions から出て來たものであり、それを正確に代表するものとなし、是を幼兒の表象や盲啞の表象に就いて例

示し、以て吾々の表象が印象の原因であるのではなく印象が表象の原因であることを證明してゐる。又、印象は其が消失しても其の模寫 (copy) が心によつて撮影されて殘されてゐる。この模寫が吾々の表象と呼ぶものなのであるとも言つてゐる。

デカルト、ライブニッツ等大陸の合理論哲學者によつて想定された先天的觀念 innate ideas の存在をば否認するヒュームの立論はカントが獨斷論の睡りから呼び覺まされたと告白した經驗論的主張であつて認識論の問題として甚だ重要であるが表象の強度なる心理學の問題としても極めて重要な意義を持ち後人に影響を與へたことは強く且つ深い。それは表象が感覺の模寫であるといふ見解である。感覺を基準として表象を考察し、時間的に先づ最初の、そして基礎的な心的内容として感覺から出發する行き方である。

フェヒナー Fechner, G. Th. やゴールトン Galton, Fr. なども明白には言明してゐないが表象に強さの特性を認めてゐたやうに見える。

フェヒナーはその著、精神物理學要論 Elemente der Psychophysik (1866) の第三部に於て想起像 Erinnerungsbilder と殘像、及びその兩者の中間に介在する過程に就いて多數の觀察事實を蒐集記録した後最後に是等に就いて一般的な考察を行ひ、これら諸過程は「それ自身としては決して互に根本的に異なるものではなく寧ろ同一の精神物理的過程であつて、それが直接内部から出て來るか或は外部から興奮されるかによつて想起像となり殘像となるに外ならないといふ印象を與へられる。想起像は客觀的の像の遅い再響 Wiederhallung であり、殘像はその直接の殘響 Nachhallung なのである。この發生の仕方 of 相違と共に彼は強さ、Stärke に於ける相違、能動性と所動性の感情に於け

る對立の相違、及び兩者の異つた局在感情 Lokalelm 三を擧げてゐるのである。是を以て觀ればフェヒナーは表象に強さ又は強度の屬性を認めてゐることが知られる。ゴルトン<sup>(12)</sup>も亦た、夢想 visualization のあらゆる形即ち殆ど有るか無きかの夢想到に始まつて完全な幻覺に終る視覺的夢想の全連續が單に強度の程度の相違の連續に非ずして過程そのもの、特性に於ける異種類の連續であると言つてゐるのに徴すればフェヒナーと同様に強度の屬性を認めてゐたと見做されるであらう。感覺に強度の別がある以上それの寫しである表象に強度の別が無い筈は無い。表象は感覺の再生であるといふ考がどうしても抜けぬから表象の強度は殆ど無意識的に承認されてゐてヒューム以後殆ど是を怪しむやうな人は無かつた。この事實によつて吾々は表象の模寫説が如何に根強い且つ一般的な考へ方であるかを認識せざるを得ないのである。

さて表象に強度があるかどうかを疑ふその極めて稀な人に割合古い所ではロツツェ Locke, H. を、割合新しい所ではチーエン Ziehen, Th. を見出すのである。

ロツツェの見解は感覺對表象の問題に就いてもシュトンプの指摘<sup>(13)</sup>してゐるやうに時代によつて幾らか變化があるやうであるが、その變化は感覺の方に關して、あつて表象の方に關する限り、餘り變化は認められない。即ち初期に於ては感覺に就いても作用と内容を區別し、作用に關する限り感覺にも強度を認めなかつた。この考がその後變更されたのであるのに過ぎない。一八五三年に公にされた小論文「表象の強度に就いて」の中に彼は言つてゐる。<sup>(14)</sup>

「表象の中にハッキリした表象とハッキリしない表象とがあること、従つてそれ等が意識に對する異つた値を測定する爲にどこかで、どうかして比較する量の規定をばそれに對して用ゐなければならぬことは勿論何人も敢て疑はな

いであらう。然しながら疑はしいのは尺度を持つて来る場所と仕方とである。少くとも種々の疑ひなしには異つた明度 *Kartheisrad* の根拠が直接に表象 *Vorstellung* 又は知 *Wissen* の異なる強度 *Intensität* にあると思ふ假説的想定を考へることは出来ない。」とて表象の間に明度の違ひの存することは確かであるが、それが表象の強度の違ひに基くと考へることに對しては反駁を加へてゐるのである。

「像の現はれる明度の程度は像が現はす *Kanzellen* もの(表象内容のこと、筆者註)の量 *Größe* (廣狭の量であつて、強度をも含む、筆者註)からは獨立である。風のかすかな私語、燃え出さうとする光の弱い明るさも雷鳴の轟きや晝間の太陽の輝きに劣らずハッキリ想起される。」是を以て觀れば強度と言ふが如き量的規定はすべて表象内容に數へ入れられねばならない。内容に向けられた表象活動は未だその強度の如何なる差違も示さない。かの前者の表象は強いもの、の表象とか弱いもの、の表象であつて、決して強い表象とか弱い表象ではないのである。従つてロツツェは又、想起の表象活動は *Stratos* である。その産物のあらゆる量的規定は様々の内容の量の規定から由來するのであると言つてゐる。

この論文に遅ること三年にして初版が現はれ、又最も詳述されてゐる *Mikrokosmos* の第一卷(初版、一八五六)を繙くならば、表象の作用には強さの差違が無い、かゝる意味に於てそれは全く強度の無い状態であると言つてよいと論じてゐるのを見出すのである。

⑩ 彼は先づ物的事變を計算する時に用ひるのを常とする強さ *Stärke* の概念をばわつて表象經過 *Vorstellungsgang* を説明する爲に用ひることは幾つかの困難を引起して來ると言つて先づ感覺、即ち外部刺激の現存的影響作用によつ

て吾々の内部に興奮される表象に就いてその困難を述べる、その所で彼はかやうな表象、即ち感覺には度の異なる強さが具はつてゐる。如何なる感覺も同時に多大な、又は僅少な震撼 *Erschütterung* として、多かれ少かれ吾々自身の中に喰ひ込む状態として吾々に感ぜられる。大い音は吾々の知覺にとつて單に大い素材であるだけではない。大い音の知覺は小い音の知覺よりも吾々に於ける、より強い印象であるのとて感覺に強さの度の差違が存することを強調してゐる。

それについてロツツエは三のものを區別しやうとする。第一は表象(この表象は廣義の表象であつて感覺を含む)された内容の多少、第二は表象内容が吾々に及ぼす興奮の強さ *Stärke*、第三はその印象が吾々の表象經過に及ぼす力 *Macht* である。この三の異つた規定は彼によれば唯だ未だ何等の經驗を持たない人の感覺(新生兒の如き、筆者註)に於てのみは完全に合致する。然し吾々の想起に於てはこの中の第二のものが消失する。想起は過去の感覺の内容をその種類と強さの上で忠實に繰返す。けれども同時に吾々が會てそれから受けた震撼は繰返さない。震撼をなすやうに見えても實際は寧ろロツツエによれば過去の震撼の單なる像をば第二の再び喚起された過去の内容の直觀に附加するに過ぎないのである。雷鳴の轟きは吾々の想起に於ては、その特性とそれの強さが如何ほど明瞭に再現されやうとも最も弱い音のそれと同様明瞭な表象が吾々に起すより以上の力強い興奮を起すのではない。

屢ば引用される言葉であるが彼は言ふ。痛の表象は痛ではない。快の表象は快自身ではない。苦痛もなく喜びもなしに意識は過去の印象の内容をその内的關係のあらゆる多様性と共に、それに結びつく感情の像 *Bilder* をさへも一緒に再び生ぜしめる。然し像の代りに印象 *Eindrücke* 自身を再起させるやうなことはしない。



それから又かうも言つてゐる。なるほど想起の思想経過は或は大なる或は小なる、或は強い或は弱い内容を意識に再び持つて来るであらうが意識がそれに用ふる表象作用 *vorstellende Tätigkeit* は度の差が無くどの場合でも同程度なのであるであらうと。

是を要するにロツツエは一見表象に強さの差違が具つてゐるやうに思はれるが、それは表象内容の強度の別であつて、表象する作用に強弱は無いのであらうと考へてゐる。彼のこの表象内容に對する表象作用の區別は注意さるべきであらう。

又、チーエンはその著「生理的心理學綱要」に於いてかう言つてゐる。<sup>16)</sup>

ヒュームは表象が感覺 *impressions* の模寫に過ぎず。即ち *geringere Lebhaftigkeit* によつてのみ區別されると言つた。然しそれに對して吾々は感覺の想起像又は表象は質的にも感覺から根本的に異つてゐることを擧げなければならぬ。太陽の表象は單にボンヤリした太陽であるだけではない。實際に見られた太陽の耀きと色の裝ひを缺いてゐる。感覺と表象との間には強度の差違は存在しない。唯だ質的差違が存在する。感覺の表徴たる感性的な生氣 *sinnliche Lebhaftigkeit* は表象には決して僅少の強度に於て存するのではない。頭から存在しないのである。弱い雜音の表象と強い雷鳴の表象とは強度の違ひを示さない。兩者は等しく感性的な鮮かさを缺く。従つて兩音が感覺に於いて持つ強度の差は表象に於いては失はれるに相違ない。なるほど吾々は大きな強度を持つた感覺についての表象を持つことが出来る。然しそれかと言つてそれは表象自身が強いのではないと。

ロツツエは表象内容には強度の違ひが存するであらうが表象作用そのものにはその違ひは全く存しない、若くは唯

だ一様の強さが存するのみであると考へ、強度をば震撼、興奮又は印象の度と解してゐるが、チーエンは、強度をば感性的鮮かさの多少と解し、かやうな意味の強度の差違が表象の間には存立しないと考へるのである。

何れにしろ彼等は表象に強度なる屬性を始めから認めない者であるが、それに對して強度の屬性を一應は認める。然しながらそれは感覺の強度とは區別されなければならぬものである。表象の強度の差違は知覺の強度の其と意味を異にするものであるといふ意見がある。吾々はこゝに於いて第二の問題に入るのである。

三

是に就いて割合詳かに意見を述べてゐるのはスタウトである。彼はヒュームによつてなされた弱い faint 状態と強い vivid な状態としての表象 image と知覺 perception との間の區別が個人的な表象能力の違ひによつて一般的には成立しないことを認る。吾々は現實的に感覺された音、又は色の方が其に對應する表象 image より必ず大であり、又は明いと斷言することは出来ない。けれどもこの區別をば全然排斥してしまはなければならぬことはない。この vividness とは impressions にも ideas にも等しく現存するらしい強度的等級とは何等か異つたものを意味するに相違ない。ヒュームは其を兩者が吾々の心を打つ力と生氣の違ひであると言つてゐる。この「心を打つ」といふことが重要な點である。要するに差違は單なる程度の其ではなくして種の差違である。或は又言ふ、この心を打つ力と生氣の度は吾々が普通感覺の強度の下に意味するものゝ一部分である。ところが感覺の強度のこの構成が心像 mental imagery には缺けてゐるのである。

即ちスタウトは表象に強度なる表徴をば全然認めないのでなく、感覺の持つ強度のやうな意味の強度、彼の所謂「印象的強度」 *impressional intensity* を缺いてゐることを認める。然しある意味に於て強さの違ひの存立することを否定してゐないやうである。それは然し感覺の強度とは異なる強度であるから、強度に就いて感覺と表象を同一線上に置いて比較し、兩者の違ひをば強度の大小の違ひ、従つて程度の違ひであると見做すことを排撃するのである。

表象の強度に就いてスタウトに割合近い意見を持つてゐたのはキュルベである。彼はその晩年の講義に於いて表象像 *Bilder* に於ても感覺に於てと同様に質 *Qualität* と強度 *Intensität* と持続 *Dauer* とを區別することが出来ると説いてゐる。<sup>18)</sup> そして言ふ。

觀念 „Ideen“ が僅少なる強度によつて印象 „Eindrücke“ から區別されるといふのは古い、特に英國心理學者によつて代表される説である。然し表象像の強度と感覺の強度とを同一段階上に置き得るかどうかは一般に疑問であらう。如何に明るい光の像でも光らない、如何に強い雷鳴の像でも轟かない、如何に強い痛みの像でも皮膚を刺したり、火傷させたりしない(ロツツニ)。少くとも此處には大なる個人的差違がある。なるほど表象に於て強い内容と強くない内容とを區別することが出来るのは確かである。然しながら同時に此區別が刺戟の強度に對する識別感受性 *DE* と同義ではないことも亦た確かである。萬一上述の學說を認めるならば最も大きい音の表象像が最も弱い音の感覺よりも弱いといふ逆説的な結果に到達するであらう。覺阈 *Empfindung* のまだ下にどうして識別され得る強度の大なる段階が存し得るであらうか。(以下八行略) সেইいふことからして感覺と表象像とはそれらの強度

に關して一刻に量の順序に置くことは許されることが明かとなる。そうであるから、それに就いて表象像の方は生氣 *Lebhaftigkeit* と言ひ、感覺の方は強度と呼ぶのが適切であらう。云々

このキェルベに甚だ近い見解を持してゐる者にエツピングハウスがある。彼は表象に生氣 *Lebhaftigkeit* の程度の別が存在することを説く。この表象の生氣は時によつては極く弱い感覺と混同する位に似てゐることがある。従つてエツピングハウスは表象の朦朧性と生氣なる特性は感覺の強い弱いといふ特性、即ち感覺の強度と謂はれるものと確かに何等かの内的聯關に立つことを認めてゐる。それにも拘らず彼に従へば兩者は他の點に於て全然互に異なるものであつて區別しなければならぬものであるやうに思はれる。極く強い音、極く明い光の如き極く強い感覺は必ず大なる生氣を持つ表象となるとは限らない。是に反して極めて弱い感覺は必ず極く漠然たる表象となるとは限らない。極めて強い感覺が表象としては甚だ不明瞭なことがあり、極く弱い感覺でも甚だ明瞭に想起され、表象されることが珍しくない。感覺の強度と表象の生氣との間にはあらゆる可能なる自由が存在する。エツピングハウスは其故に表象が感覺に對する關係はヒュームの如く單に極く弱くなつた感覺であると見做してもならないし、又それかと言つてロツツエのやうに表象を感覺から全然異つた非感性的な象徴の如く見做すことも出来ない。兩者を同時に考慮に入れなければならぬと言つてゐるのである。即ちエツピングハウスは表象が感覺の強度に似て居り、内的關係を持つてはゐるが其と同一視することを許されない生氣なる屬性の存在を説くのであるから前述のキェルベの見解と殆ど符合すると見做しても大なる不當ではあるまい。

なほ表象に感覺の強度に對應する強度の屬性を認めながら同時に強度と混同を許さない明度 *Deutlichkeit* の屬性

を主張するデ・エ・ミューラーがあることは吾々の注意に値する。

#### 四

吾々は以上その所説に幾らかの強弱の差別はあれ、大體に於て感覺の強度と全く對應する強度の表徴を表象に於ては認めやうとしない人々の言ふ所を聽いた。次に吾々はその反對に表象に強度の表徴を認める側の人々の所説を聽かなければならぬ。その言辭は些か曖昧な節が無いではないが兎に角ヒュームが印象と表象とを分別するに「吾々の心を打つ強さ force and liveliness なる標識を以てしたことは確かである。ヒュームの直系と見做すことが出来る英國聯合心理學者、ミル父子 James Mill, John Stuart Mill, ベイン Brain, A.、スペンサー Spencer, H. 等がヒュームの意見を繼承してゐたことは是を特に問題にしてゐないのみならず、殆ど自明のこととして記述もしてゐないことによつても推定される。僅かにジョン・ステュアート・ミルがその例外であるだけである。彼は父の著述 *Analysis of the Phenomena of the Human Mind* の註釋として感覺對表象のことを補述し、感覺 *Sensation* と表象 *Idea* との異なる諸點の中で最も明かなのは強度 *Intensity* の度 *degree* であると述べてゐる。それは結局ヒュームの主張の布疋的敘述であつて、それに對して批評的態度を探つたり、自己の見解を述べたりしてゐるのではないのである。強度の表徴が俄然注目されるに至つたのは最初に述べたやうに心的要素としての感覺の持つ屬性が問題とされ理論的且つ實驗的に攻究され始めてからである。即ち感覺の屬性としての強度から延いて表象の屬性たる強度が注視され始めて來たのである。注意すべきことはこれら表象に強度を認める人々は暗黙の中に表象が感覺の模寫であること

を豫想してゐること、即ち兩者の質は全く相等しい、唯だ強度を異にするのみである、といふ立場である。これは看過すべからざる根本的立場であると思ふ。

先づヴントは再生表象は普通の事情の下に於ては強度の小なることを以てその特性とすると言つてゐる。<sup>(20)</sup>或は又「強度は心的要素、即ち感覺と單純感情に於てのみ一義的に指摘することが出来る。心的複合體 *zusammengesetzte Geilde* たる表象、情緒等に於てはそれが分解され得る個々の要素に於て違つた強度を持つ。例へば空間的表象はその各部分の凡てに於て感性的印象の同じ強さを示すことは決してない。」云々と説いて表象の強度が感覺の其に比すれば甚だ複雑で多義的なるを認めてはゐるがその存在を疑つてはゐないのである。<sup>(21)</sup>

ゲ・エ・ミユラー G. E. Müller も詳述はしてゐないけれども表象の明度 *Deutlichkeit* と強度との間の關係を全く平行的なりと考へてしまふことを排斥し、或は聽覺的表象像の強度の差違を云々してゐる如きを以てすれば彼が強度の特性を認めてゐたことは明かである。<sup>(22)</sup>

この點に就いて最も明確に所信を披瀝してゐるのは感覺の屬性論を發展させたティチナー Titchener, E. B. である。彼は表象(心像) *image* にも感覺と同様に質 *quality*、強度 *intensity* 及び持續 *duration* の屬性 *attribute* を認め、と言明してゐる。そしてそれに強度の屬性を認めないロッツェやチーエンの所説をば二つの刺戟錯誤 *stimulus error* を犯せるものとして反駁を加へてゐるのである。<sup>(23)</sup>

然しティチナーは單に理論的な考察に終止するだけでは満足せず、この問題をば實驗的な攻究によつて解決しやうと企てゝゐた。その企ての現はれがシャウプ Schaub, A de Vries の研究である。<sup>(24)</sup>この問題に幾らか接觸するやうな

實驗的研究はそれ迄に全然無い譯ではないが、然しこの問題を特に實驗的研究の對象として取り上げたのは彼を以て始めとする。そうであるから少しくその研究方法と結果に就いて述べやう。

この實驗的研究の目的はシャウプに從へば次の二の問題に答へやうとするにある。

(一) 表象 image は強度の屬性 attribute of intensity を持つか。

(二) 若し持つとすれば此の強度は感覺の強度と比較し得べきものであるか。そしてどれ位までそうであるか。

表象の實驗的研究には特に困難と錯誤が伴ふ。その中、最も重大なるものは一は刺戟錯誤であり、他の特に致命的な一は強度 intensity と明度 clearness との混同である。

刺戟錯誤とはテイチナーの用語であつて内省に際して感覺とか表象とか感情とかの心的經驗を記述すべきであるのに是を知らずして物的な刺戟のことを記述する錯誤である。心理學的內省に未熟なる者の極めて陥り易い錯誤である。

次に強度とは意識に於ける感覺なり表象なりの持つ方である (strength of thought)。それは感覺刺戟の強度によつて規定される。

明度は是に對して注意の程度に依存し、又は其と同義である鮮明に意識されてゐる程度を意味する。即ち明度は觀察者の見方又は態度に關係した概念であるに反して強度は感覺又は表象そのもの、持つ屬性であつて觀察者の態度とは絶對的ではないが少くとも相對的には無關係なものである。

彼は觀察者がこれらの重大錯誤に陥ることを防ぐ爲に夫々周到な豫備實驗を行ふと共に一方では刺戟の呈示法、教

示の與へ方に意を用ゐて主實驗を行つてゐる。

觀察者は心理學的觀察に習熟し内省に堪能な人々四名である。主實驗は8系列から成る。第一系列に於ては觀察者が表象に就いて強度を云々するかどうか。若し強度に就いて語るとすればどんな言葉を用ゐるかを確かめやうとする。言ふまでもなく觀察者は何れも實驗の目的に就いては全然知る所がない。觀察者は机から3米を隔つた所で背を向けて坐す。机の上に音叉があつて用意の合圖をしてから實驗者は音叉を打ち一秒間響かせて置く。一秒後に音叉を抑へて音を止める。半秒の後再び音叉を打つ。唯だ始めよりはズツと強く、又はズツと弱く、又は殆ど同じ強さに打つ。かくて前と同様一秒間そのまゝ響かせる。かやうにして觀察者は音の直接記憶がすつかり消え去るまで待つ。それから全體の經驗を記憶に於て再生する。そしてその内省を詳細に記録するのである。

第二系列は唯だ二音を聞かせてから再生させるまでの時間を一定にして二十秒後とただけの違いである。その二十秒間はなるべく別のことを考へさせるやうに雑音を聞かせたり、色や畫を見せたりして置く。

第三系列は二音間の間隔の長さが強度の表象 *image of intensity* に及ぼす影響を見る爲に間隔を長くして一分まで延ばす。

以上の實驗系列に於て觀察者は凡て表象に強度のあることを報じ、この表象の強度が種々の異なる度を持つことが明かになつた。そこで次には感覺の強度の違いに比して表象の度はどれ位細かく區別が出来るであらうかが問題となる。そこで第四實驗系列に於ては感覺として最小可知差違の強度を與へる。それには音叉を打つのでは困難であるから音振子 *sound-pendulum* を用ゐる。振子の日盛で例へば  $20^\circ$ ,  $32^\circ$ ,  $40^\circ$ ,  $55^\circ$  の四個の最小可知差違の打音をば



上昇的又は下降的に與へる。音の数は四個、三個又は二個を用ゐる。それから二十秒乃至三十秒後に想起させる。

第五系列は(一)一對の音だけに限ること、(二)間隔を長くして六十秒と百二十秒とするの二點で第四系列と異るだけである。

第六系列では今までの記憶表象の代りに想像表象を観察するのである。先づ始めに一つの中音の強さの音を聞かせる。それから五分間雑談をして、その後二の音を想像させる。實驗者の指圖に従つて上昇の二音、下降の二音、強い音を二、弱い音を二、接近した最小可知の二音などを。觀察者が想像表象が現はれたことを相圖すると直ちに實驗者は二音を鳴らしてゐる。そして觀察者に教へられて又、別の二音を打ち、かやうにして次第に觀察者の想像した音に近からしめる。

第七系列は表象の強度 *imaginal intensity* の極大限及び極小限を確かめる爲に非常に弱い、又は非常に強い二音を與へる。

第八系列は聽覺の表示とその他の感覺領域の表象とを比較する爲に視覺の明度に就いて觀察する。明度辨別箱で以て暗室で二の明度を呈示し、それから直接の殘像の消去するのを待つ。そしてその後で二の明度を想起させるのである。

これらの實驗的觀察の結果をシャウプは次の三項目に従つて叙べてゐる。

(一)強度が表象に歸せられること。

(二)表象の強度の程度の違ひ。

(二)感覺と表象との間に強度的差違無きこと。

先づ(一)のシャウプの研究の問題は表象が強度を持つか持たないかを決定するにあつた。この問題に對する答は單に觀察者の内省に徴すればよい。觀察者は前述のやうにこの實驗の目的が表象の強度を確かめるにあることを全然知らないのである。それにも拘らず觀察者は何れも表象の屬性として強度のことを度々述べるのに徴すればどうしても表象が強度の屬性を持つことを承認しなければならぬと言ふのである。彼の擧げてゐる任意に選擇された、従つて類型的と見做すことの出来る内省の例を擧げるならば

第一系列。觀察者C。「非常にハッキリした聽覺表象、感覺の様に高さ、強さ及び時間々隔がある。」「感覺のやうに強度のある純粹に聽覺的な表象。」「聞いた音と同様に高さと同強さを持つよい表象。」「表象の強度は感覺の強度よりは幾らか弱い。」

第三系列。觀察者F。「表象は質と強度の何れについても感覺の非常に正確な寫しであると思ふ。」「感覺の強度とは、同じ位の強度を持つたよい表象。」「表象は感覺ほどはハッキリしてゐなかつた。」

第六系列。觀察者O。「音の大きさに於て表象は感覺と全然同じである。感覺と表象は性質が違ふから若し兩者に共通な要素が無ければ勝手な標準を作ることなしに兩者を比較することは出来なかつた。私は自分勝手な標準を作らずに、強度によつて兩者を比較した。そうであるから私は兩者が、力とか、生き生きさ、純粹さ等全ての他の點では異なるにも拘らず強度が共通の要素であることがわかる。」「よい表象を得られたが、始めの音の表象は幾らか強過ぎた。二番目の音のは感覺とその強度が丁度同じであつた。」

かやうにシャウプの觀察者はどの觀察者も自發的に強度を表象に歸屬せしめたのである。そしてそれは彼の各實驗系列の諸實驗の大部分に於て起つたのである。

然しながらこの觀察者の内省報告を見る時吾々は彼等の所謂強度と呼ぶものが何であるかに就いて疑はしく思はざるを得ない。彼等が強度と言つてゐるもの、中には表象の鮮かさが意味されてゐることが少くないやうである。豫備實驗に於てこの混同を防ぐ爲に觀察の習練を重ねたにも拘らずやはり起るやうに見える。それから又彼等の報告する音の表象の強度が表象そのもの、強度ではなくて音の強度、即ちものと刺戟の強度のことを意味してゐるのではないかと疑はざるを得ないやうな場合が時々ある。又體験の記述たるべき内省に於て往々にして意見を述べて居る。その意見は感覺を基準として表象を觀察し、感覺の模寫として表象を見る見方である。觀察者に共通なこの見方は表象體験の觀察に當つて表象に對する主觀的な解釋となつて災することは無かつたであらうか。

シャウプの研究結果を受け容れるに當つて看過することの出来ない今一つの重要な點はその實驗手續に就いてである。それは彼の觀察した表象は何れの實驗系列に於ても音の知覺後僅か二十秒を経た後に再生した表象であることである。言はゞ直接記憶表象である。かやうな直接の想起表象とも言ふべき表象に於ての内省だけから一般の表象の、特に強度と言ふが加き困難な問題を解決しやうとするのは些か大膽に過ぎるではなからうか。想起表象と感覺との時間的間隔が小である爲に前述の主觀的解釋の入る危険は甚だ大である。音の知覺と音の想起との間の間隔は更に大きく、五分、十分、一時間乃至二十四時間、一週間など種々の大きに採つてみて觀察する必要はないであらうか。宛もウルフの表象變化に關する實驗手續の如くに<sup>21)</sup>。

是を要するに上述のやうな二の懸念からして吾々は表象の強度に關するシャウプの研究結論をばそれが實驗的觀察であるといふ理由からして特に即座に信賴したり、そのまゝ受け容れたりするといふことは出来ないのである。

シャウプはかゝる點に氣付く筈はなく觀察者の内省によつて表象に強度の屬性が存在することが確證せられたと考へ、第二の問題に移つてゐるのである。それは前述の如く表象に強度があるとすれば、その強度は感覺の強度に比し得るか、そしてどの程度まで比し得るかの問題である。是に就いてもシャウプは觀察者が表象相互間の強度の差違が感覺相互間の強度の差違と全く同じであると報告した内省の例を挙げ、又是を表にして示してゐる。然しながらこの結果に就いてはやはり前述と同様の疑ひが向けられるのである。

最後にシャウプは主問題たる強度とは直接の關係は無いが表象と感覺との比較に關して重要な結果を見出してゐる。そして宛も此の事實が感覺と表象との間の識別表徵が見出されるのは強度に於て、*は*ないと云ふことを裏面から證明するものであるとしてゐる。その事實といふのは何れもそれらの間の差違をばこの二の經驗の強度以外の他の表徵に於て認めてゐるからであると。それに就いて觀察者の内省を挙げると、

觀察者D。「表象は實際の音よりも微妙であつて實際の音ほどカサ張つたり、厚くはない。音は表象に於ても感覺に於てと同様に強い。けれども「容積」volume が無い。即ち音に伴ふ筋肉感覺及び有機感覺が無い。」「表象はある仕方で省略されてゐる、——表象は感覺が持つやうな充實 fullness、生氣 vividness、aliveness、鋭さ sharpness が無い。いつも感覺に伴ふ鋭い音、又は殘音 aftertone と有機感覺が表象では再生されない。」「

觀察者O。「正確な強度を持つよい表象。感覺に存する運動的同伴物が表象には存しない。」「感覺の方が充實してゐる

る。印象性 *impressiveness* の要素が表象には缺けてゐる。「感覺は諸運動感覺に伴はれ、雑音や上音に伴はれるが、それらのものは表象に於ては一つも起らない、表象は感覺より純粹であり單純である。」「表象は強度に於て感覺から異なるのではなく、それに伴ふ充實や運動感覺に於て異なるのである。」

観察者C。「表象は感覺よりも安定でなく印象的でない。」「強度に於て感覺と正確に等しい二の表象を得た、然しそれらは遙かに主觀的であつて、刺戟に伴ふ運動的衝激、*kinesthetic shock* が無い。」「表象は薄ッペラで省略されてゐるけれども強度に於ては刺戟と變らない。」

これに似た内省報告は非常に多く、それらは何れも感覺と表象との間の差違が強度の差ではなく、生氣 *arousal* 又は筋肉感覺複合に存することを證してゐると。

かくしてシャウプは結局次のやうな結論を引出してゐるのである。

(一) 強度は表象の屬性であるか。少くとも通常の實驗室的條件の下では表象は強度の屬性を持つこと疑ひ無い。  
 (二) 若しそうであるとすれば表象の強度の本性はどういふものであるか。感覺の強度と如何なる相違があるか。この問題に對してはそう簡單に且つ決定的には答へられない。けれども強度に二の異なる種類が存在するのではない、感覺の強度であれ表象の強度であれ強度の屬性には何等の變りは無いと信すべき多くの理由がある。如何なる場合にも如何なる観察者も表象の強度と感覺の強度との間に強度としての差違あることには氣付かなかつた。又彼等が兩者の強度を容易に比較し得るのも兩強度が同一性質のものであるからである。即ち強度の段階に關しても極く大い極端の段階を除いて表象的強度は感覺的強度と對應すると。

このシャウプの結論に對しては前に述べた吾々の見解をもう一度想ひ起してみる必要がある。それはシャウプの觀察したのは概ね感覺が終つてから僅かに二、三十秒を隔て、喚起されたその感覺の直接の想起像であることである。シャウプ自身が自認して言つてゐるやうに觀察者の數も稍少いが特にそれは觀察範圍が餘り限局されてゐるから、「此の結果から獨斷的態度を採ることは正當ではない。」

コフカは<sup>⑤</sup>シャウプの如く直接に強度を問題とし、又表象と知覺との比較觀察を行つたのではないが、彼の表象の分析はこの問題に就いても幾らかの資料が得られる。コフカはその觀察者が極めて強く感覺に劣らないほどの鮮かさを報告するのに遭遇し、感覺と表象の間の強度、明度の差が決して絶對的の差ではないことが證明されたと言つてよいと叙べてゐる。然し是に就いての彼の觀察は固より副次的であつて充分ではない。それに彼は強度と明度とを同一視してゐる。

## 五

表象の強度の問題に關して深い考究を加へてゐることシュトゥンプに比肩し得るものは殆どあるまいと言ふことが出来る。吾々はそこで先づ暫く彼の所論に傾聴しなければならぬ。こゝで特に採り上る彼の所論とは「感覺と表象」<sup>⑥</sup>と題するプロシヤ學士院の論文である。彼はこの二の心的現象の間の關係に關する古い、異論の多い問題をば外的刺戟の存否によつて區別せむとする因果的發生的説明を排し記述的現象的な規定を與へなければならぬとし、先づ聽覺及びその他の感覺領域と、視覺の領域とに大別し、夫々の領域に於る感覺と表象とを種々の表徴に關して順々に検討し、

感覺と表象とを絶對的に區別し得る表徴の存在しないことを例證し、あらゆる感覺の表徴にして表象に見出されぬものはなく、表象の表徴にして感覺に具備されてゐないものはない。感覺と表象との差違はさうであるから絶對的差違ではなく表象相互の程度の差違、特に強度の差違に止ると見做すことが出来るといふ結論に達した。彼は諸表徴の程度の差違の中に就いて特に強度の程度の差違を重大視し、こゝに表象の強度と感覺の強度との關係に關する彼の學說を展開させてゐるのである。

先づ第一にシムトツンブは特殊的差違として、はあく程度の差違として、はあくが兎に角表象に強度の屬性の具はれることを認める。そして是を認めない學說を論評する<sup>(27)</sup>。既に前に述べて來たやうに表象の強度を拒否する學者に表象された音に全然強度の差違を認めないロツツエやチーエンの如き立場と表象の強度は感覺の強度と全然意味を異にする<sup>(28)</sup>と考へるスタウトやキェルベの如き立場とがある、先づ前者の表象に感覺の強度に比し得る程度の差違を認めない見解はシムトツンブに従へば觀察と明かに矛盾する。吾々は單なる表象に於ても Forte と Piano との違ひや言葉のアクセントや雷鳴の強くなつて來るのや弱くなつて行くのを聞くことは争はれない、表象された音に強さの差違を全然拒否する人々はおかやうな諸事實を説明する爲に例へば伴隨的な、一緒に表象される副次的事情の如きものを指摘するでもあらう。例へば表象された強音はそれと一緒に表象される歌手又は吹奏者の強い呼氣や一緒に表象される喉頭筋肉の緊張によつて、時には表象された筋肉緊張でなく實際に筋肉緊張が起ることによつて弱音から區別されるに相違ないと言ふであらう。但し表象でなく實際の筋肉緊張は決して必然的に存在するものではない。特にそれは吾々自身によつて歌はれ又は奏せられる音でなしに、劇場の管絃樂とか近い自動車の警笛とか小銃の一齊射撃の音を表象

する場合は存在しない。若し筋肉の緊張の表象を以て表象された音の強さの差違に代へるならば、筋肉緊張表象に強さの差違が具備されてゐることを豫想することになる。即ち音の表象に拒否されたその同じものが筋肉表象には承認されることになる。なぜ筋肉運動表象にだけ承認される強さの差違が音の表象には承認されないのであらうか、何れにしる、表象の無強度性の命題はも早一般には確かめられないのである。

それでは筋肉緊張感覺以外に視覺的な副次表象が強さの差違の認識を助けるのであらうか、かう言ふ人があるかも知れん、「*phantasia*」を奏する管絃樂を表象する者は誰でもズツと多數の、ズツと廣汎な視覺表象を持つ。絃樂器の奏者の自在な運動、管樂器の奏者の空氣で膨らんだ双頬、磨り打ちをする太鼓の打手が心に浮ぶ。彼等の奏する音は是に反して少しも強さを持たない」と。してみると凡ては空閒性を伴ふ視覺表象に還元されてしまふ譯である。

然しながらピッコロの如きものは樂器そのものが極く小さいばかりでなく是を吹奏する見得る運動も極く小さいにも拘らずピッコロは表象に於ては、た易く強さに關して他の諸樂器から傑出してゐる。その他に極く強い音の發現する外的符號は聽覺的な素質者にとつては強要的に強烈な音表象を喚起するのである。

是を要するにシトツンプに従へば他の屬性は多かれ少かれ感覺と同様に保持されてゐるのに強度なる根本的に重要な屬性だけが表象にはどうして缺けてゐるのであるか、又如何様に缺けてゐるのであるか、了解に苦まざるを得ない。是を以て觀れば吾々はどうしても態度の差違が表象にも具つてゐることを認めなければならぬであらう。

ところが前に述べたやうに表象に強度の屬性を認めないもう一の立場がある。それは今述べた見解と違つて強度の屬性を全然認めないのでなく、一應は認めることは認めるのである。唯だその表象の強度の差違は感覺の強度の其



に對應する差違に過ぎないのであつて決して同一の差違ではない。表象に於ける *Pianissimo* と *Fortissimo* は感覺に於ける其と何等か對應するものであり、一定の内在的特性を平行的に持つてゐるには相違ないが、而も其自身決して強さと呼べるべきものではない、宛も文字の體系が其自身としては全く似てもつかぬ聲音の體系に對應してゐるやうなものであると言ふ。シュトゥンプにとつてはこの立場の正當なる理由は何處にも見出されない。なるほど表象された雷鳴が強さに於て實際聞かれた雷鳴には及ばないことは何人も承認するであらうが、それかと言つて、前者に於ける強さは後者に於ける強さと全く意味の違ふものであるといふ結論は決してそれから引出されはしない。寧ろその逆に普通言はれるやうに矢張り表象の強さも感覺の強さも強さに變りはないといふ結論が引出され得るであらう。又その他の諸屬性は表象に於ても感覺と同じ意味で保持されてゐるのにどうして、そして如何様に強度の差違だけが異質的なものに轉化しなければならぬか。是を理解するに苦まざるを得ない。

かくしてシュトゥンプは表象に強度の屬性の具はれることを認める。而も表象の強度が感覺の強度とその意味を同じふする同一のものであると考へる。表象の強度と感覺の強度とは同一の強度線上に横はる。それでは表象の強度と感覺の強度とはどう言ふ關係に立つてゐるか。表象の強度線は感覺の強度線に直接に連續してゐるのであるか。最も鮮かな表象に相當する表象の強度線の最も高い點が最も弱い感覺に相當する感覺の強度線の最も低い點に連接してゐるのではないか。

シュトゥンプの見解に従ふとそうではない。<sup>28</sup> 表象の強度線、又は強度帯 *Intensitätszone* は直接には感覺の強度帯に接續しないのである。「通常の *merklich* な感覺の屬する強度帯と通常の非常に弱い表象の屬する強度帯との

中間にまだ一定の強度線が存してゐる。尤もこの中間の強度線に屬するやうな意識内容は極く特別の場合しか現はれない。かやうな意識内容こそは感覺と表象との間の實際の中間をなすものなのである。」

それではどうして兩強度帯の間に中間地帯が存在することが解るか。それは彼によれば吾々が日常生活に於て單なる表象をば立ち所に感覺から區別して決して混同しないことから推定される。若し中間に間隙が無く直接に兩強度がある一點に於て連續し、接觸してゐるとすれば感覺と表象とが混同されることがもつと遙かに屢ば日常生活に於て起らなければならぬ筈である。それにかやうな事が起ることが普通の事情に於ては殆ど無いと言つてよい位であるのは表象の強度の末端と感覺の強度の末端とが相當に距離を保つてゐることが豫想される。兩強度帯がそれほど距離を隔てゝゐればこそシュトゥンプに從へば、ロツツエ等のやうに感覺と表象とが程度の差違ではなく特殊の種類であると主張する學者があり、而も彼等の主張の内に正當さが幾らかは存してゐるのである。又、兩者の中間的意識内容が普通は殆ど現はれないが現はれることが事實あるのを以て觀れば兩強度の間の中間帯はあまり狭小のものではなく相當に大い延長を持つてゐると推定しなければならぬ。

次にシュトゥンプの見解に從へば通常の表象の強度帯を感覺の其に比すれば前者の延長は比較的小であるらしく思はれる事實が觀察される。表象の強度の最頂點と最低點との兩極は感覺に於るほどは相互に隔つてゐない。表象された Fortissimo と表象された Pianissimo との隔りは感覺された Fortissimo と Pianissimo との隔りほどではない。

強さの比 Starkverhältniss は記憶に保存されてゐる。然し強さの差 Starkunterschiede はズツと小くなつてゐる。」さて、この表象の強度に關する見解に對しては幾つかの反對や疑問が起るであらうと思ふ。シュトゥンプは起り得

べき反對や疑はしい點を自ら擧げ、それらに對して一々仔細に考察して満足な回答を與へやうとしてゐるのである。<sup>(29)</sup>  
 その爲に持ち出されてゐる經驗內容の解釋 Dunning の説や、表象過程の生理學的假説や啓闕、識別闕に關する論説はシュトゥンプの見解に傾徳すべきものが甚だ多い。

## 六

さて然しながら根本的な彼の表象の強度の學説に對して、延いてはテイチナー及びヴントの見解に對して吾々は次の相互に聯關してゐる三の難點を擧げなければならぬやうに思ふ。

第一 表象を感覺に對立させてゐること。

第二 表象の恒常假定。

第三 感覺の一屬性を以て感覺と表象とを比較したり、關係づけたりしてゐること。

次に順を追ふて是を述べやう。

第一にシュトゥンプは、それからテイチナーやヴント等も亦た同様に表象を感覺と對立させ比較してゐる。然しながら前にも述べたやうに表象は即座に感覺と比肩さるべき心的現象ではない。固より表象の概念は心理學者の間に於て必ずしも一致してゐない。第一章に述べたやうにブレンターノとその一派の如きは表象の中に感覺や知覺を包攝せしめ、且つ單なる影像、又は内容ではなく主として作用の方面を意味させてゐるのである。が其は暫く措くとして今は一步を譲り大多數の心理學者の慣用に從つて表象をば表象像の義に解することにするとしても果してシュトゥンプ

等の信じて疑はないやうに表象は感覺の幾らか褪色した模寫物に外ならないであらうか。

なるほど先に紹介したテイチナーの指導の下に行はれたシャウプの實驗に於る如く僅か二十秒前に聽いた音についての想起表象であるならば音表象が知覺した音に比肩され模寫的なることがあるであらう。然しかやうに感覺に直接比較せられ得るのは知覺後極く短時間を経た後に再生された想起表象に限るのであつて一般の表象には通用しない。

日常經驗に於て吾々が持つ表象は家屋の表象とか旋律の表象とかの如き具體的な對象的な表象であつて吾々は決して亦そのもの、表象、C<sub>1</sub>の音の表象の如き要素的な感覺に就いての表象を持たないのである。キェルベは表象は知覺に對立せらるべきものであつて感覺に對立せらるべきものではない。感覺に對立せしめらるべきものは表象ではなくて像 Bilder 又は表象像 Vorstellungsbilder であると言つてゐる。又リンドヴォルスキーも表象を感覺にではなく知覺に對比させてゐるのは誠に尤もであると言はねばならぬ。

更に翻つて他面から考へるならば一たい吾々によつて表象されるもの、中には、思惟心理學者等が實驗的觀察によつて確めたやうに、必ずしも感覺の再生と見做される直觀的なものばかりと限らず、非直觀的な知 unanschauliches Wissen、或は非直觀的な意味や關係の意識性 Bewusstheit が少くない。尤も思惟心理學者等は心理學の慣用に従つて表象の概念をば或は視覺的、或は聽覺的、乃至は運動感覺的な直觀的具象的な表象像の義に解してゐるから非直觀的な知を表象とは認めず、感覺や感情や表象とは獨立な特別な心的要素と認めたのであつたが、非直觀的な知と雖もやはり吾々が非直觀的に表象するものであるから表象の一種たるを失はない。若しそうとすればかやうな抽象的な意味とか關係とかの表象は感覺の模寫的再生ではないのであつて、かやうな表象は到底感覺と對立させ、その相互の間の

強度を云々するなど、いふことの可能なものではない。是を以て觀ても表象(表象内容)を感覺に對立させ、感覺と比類的に見做すことの不當であることが明瞭である。是がシュトゥンプ乃至はティチナー等の見解に於ける第一の誤謬ではなからうか。

シュトゥンプの見解の第二の缺陷であると思はれるものは此の表象を感覺と全然比類的に考へてゐるといふ第一の缺陷と密接に關聯してゐる。それは感覺と表象との間の關係に關して「恒常假定」Konstanzannahme が入り込んでゐることである。恒常假定とは知らるゝ如くケーラーが從來の心理學、特にティチナーの學派又は内省心理學派の持つる感覺の概念に暗黙の中に刺戟と感覺との間の關係の恒常的であることが豫想されてゐることを觀破し、是に名けたのである。恒常假定とは感覺は刺戟の直接の、且つ一定なる响數であるといふ豫想である。一定の刺戟が與へられ、常態の感覺器官が存在すれば觀察者には必ず一定の感覺が起ると考へられてゐる。即ちその時に觀察者の持つ感覺の質と強度とは既に吾々は與へた刺戟の質と強度とからして是を豫想することが出来ると思はれてゐることである。「純粹の感官所與は觀察者の舉動 Verhalten に於る變化とは無關係であつて、」<sup>(11)</sup>「その重要な特性は末梢刺戟作用の對應する特性に習ふ」と考へられてゐることを指す。<sup>(12)</sup>ヴント、ティチナー、シュトゥンプ、ゲ・エ・ミューラー等の解する感覺の強度とは對應する刺戟の量によつて一義的に決定される屬性である。精神物理學に於て廣く認められ引用されるゲ・エ・ミューラーの定義に従へば感覺の強度とは零點即ち無感覺の點に到達するまでに經過すべき距離の大小である。<sup>(13)</sup>この距離の大小は對應する刺戟の量の計量によつて始めて認知し得られるのであるから、この感覺の強度の定義

の根據には感覺の強度と刺激の量との間の平行的關係が豫想されてゐるのである。

さて刺激と感覺との間の恒常假定は感覺を刺激のそのまゝの模寫である如く諒解して錯覺や恒常現象(大きさの恒常、形の恒常、色彩の恒常等)の如き著しき事例を看過してゐるのみならず、ケラーの指摘するやうに感覺に對する主觀の態度又は心構へ Einstellung の作用を無視してゐる。この二點に就いて感覺の恒常假定は大きい誤謬を犯してゐると言はねばならぬ。

是の如き刺激と感覺との間の恒常假定に比すべき一の恒常假定がシュトゥンプの表象の強度論の根柢に横たはつてゐる。それは前述の如く感覺と表象との間の恒常假定である。表象は屢ば再生表象と名づけられるやうに感覺の再起である。感覺の忠實な寫しであつて質的に何等感覺と異なる所はないと信ぜられてゐる。唯だ僅かに強度に就いて幾らか異なるのみである。而も表象の強度と言ふも強度としては感覺の強度と何等その意義を異にするものではない。シュトゥンプはかやうに信じてゐる。テイチナーも亦たかやうに豫想して知覺した後僅か二、三十秒後の想起表象に就いてその強度を感覺の其と比較觀察したのである。

然しながら表象の恒常假定は決してシュトゥンプやテイチナーに始まつたのではない。回顧すれば既に度々述べたやうにそれは實にヒューム以來の傳統的な考へ方なのである。

今、表象の恒常假定をば感覺の恒常假定に比するならばその不當の程度に於て前者の方が遙かに後者に勝ることが明かである。何となれば感覺の恒常假定が看過してゐる第一の體驗の事實たる錯覺や恒常現象に比すべき體驗にして、第二の心構への作用にしても何れも感覺、知覺の領域に於てよりも表象の領域に於て一層著しいからである。こ

これらの體驗的事實及び是を規定する要因は知覺の領域に比して表象の領域に於て始めてその重要性が存在するのである。そうであるから同じ恒常假定であつても感覺の恒常假定に比して表象の恒常假定はその誤謬が一層大であると言はねばならぬ。感覺の強度は例外が少くないが然し多くの場合に於ては刺戟の強度と一義的關係を保つてゐるやうである。表象の強度は是と大に趣を異にする。それは刺戟の數量と直接の關係を保たないことは言ふまでもないが、キユルベの述べてゐるやうに多くの場合感覺の強度と平行せず、甚だ主觀的である。是を要するに表象の恒常假定は感覺の恒常假定よりも精神生活の認識を謬ること遙かに甚しいものである。形態心理學者等は心理學から感覺の恒常假定を排棄すべきことを力説するが吾々を以て是を觀れば心理學から先づ第一に排棄すべきは感覺の其ではなくて寧ろ表象の恒常假定でなければならぬ。

さて第三に感覺は言ふまでもなく體驗を分析し抽象を重ねて始めて認められる要素的な心的内容である。表象は是と趣を異にし體驗をそれほど抽象分析するまでもなく多くの場合體驗そのものを觀察しさへすれば割合容易に見出される心的内容である。そうであるから若し表象が感覺そのまゝの模寫である場合はシムトウソップのしたやうに感覺の屬性の一たる強度を探つて以て兩者を比較對照することも意味があるが表象は度々述べたやうに感覺と比すべからざる具體性又は複雑性を具有してゐるから感覺の一屬性を取つて以て感覺と比較論考することは殆ど意味を有しないと言はねばならぬ。表象と對比さるべきは感覺ではなくして知覺でなければならぬ。そして知覺と表象とを比較するには單なる構素内容の一屬性を以てすべきではなく、もつと具體的全體的な體驗の仕方を以てすべきであらう。

然しながら従來、心理學者は意識的に或は無意識的に表象をば感覺の再生的心像なりと信じてゐるから表象を感覺

264  
と對立させ感覺の個々の屬性又は表徴に就いて兩者の異同を論考することが行はれて來たのである。

七

是を要するに前に繰返し述べたやうに表象の強度は表象像を感覺の直接の再生と限定し、感覺の割合忠實なる模寫と見做す限りに於て是を云々し得るでもあらう。然しながら表象は感覺を隔る僅か數十秒後の直接想起表象のみに就いては容易にその本性を捕へ難い。又表象の本性は感覺とそう比類的に推定し得べきだけのものではあるまい。感覺の最後の想起表象だけではなく表象一般に就いて考察する場合は強度ではなく寧ろ鮮明度の方が正當であるやうに思ふ。vividness, Eindrücklichkeit は鮮明度に大體に於て含めさせ得られるであらう。兎に角表象一般に就いては「強度」なる屬性、又はかゝる方面の屬性を「強度」と名づけることは穩當ではない。潔く是を廢棄すべきであると云ひたい。

然しながらそれかと言つて「強い表象」とか或は「強く表象する」等といふことは往々聞くが是も正しくない表現だと言ふのではない。かかる表現は嚴密な意味に於ても何等不都合は無からうと考へられる。

それでは先づ第一に「強い表象」とは何であるか。それは單に所謂 *Aggressiveneit*, *Eindrücklichkeit* の大なる表象といふやうなものではあるまい。「強い表象」とは例へば強迫觀念の如く自分がそれから逃れたいと思つてもどうしても心内に付きまとつて來て、ともすれば現はれて來るやうな表象、即ち固執性の大なる表象の如きが是であらうと思ふ。「強い表象」をかやうに解することが可能であらう。是に反して弱い表象は單に微弱朦朧たる表象ではなく、たとへ鮮



明ではあつても直ちに泡沫の如く消えて無くなるやうな表象の如きが是であらう。

それでは次に「強く表象する」といふ表現は如何なる體驗と解してい、であらうか。この「強く」をば「意志的に強く」と解するならば「表象する」は「思惟する」と解することも可能である。然し私は古來から普通であるこの「表象する」の解し方を避けて寧ろ表象作用は思惟作用から區別された、而も思惟のみならず知覺作用からも區別された作用と解したのである。而も作用といふも大體に於てブレンドナーノから明瞭に區別され、その流れを掬む人々のするやうに内容から峻別された作用ではなく寧ろ全體的な表象體驗として見て行きたいのである。さてそれではかやうな意味の表象作用、又は表象體驗の強さとは何を意味するのであらうか。

強い表象作用は單に鮮明潑刺たる表象を持つことではあるまい。表象が強くなるとは、像が鮮明になるだけではなく表象に深味が加はるのではあるまいか。是に對して弱い表象作用とは像が不鮮明であるばかりでなく表象の仕方が淺いのである。かく考ふれば表象の強さは像の鮮明度の外に作用の深味の増加又は減少を意味することになる。そうすれば問題は更に一轉して表象體驗の深さとは一たい何の事であるかといふことになるであらう。それに就いては先づ表象體驗の本質に就いて語る必要がある。是に就いて詳述することは「表象の強度」なる本題を可なり離れることになり、稿を改めるの外はない。また是に就いては既に他の機會に幾分觸れたことがあるから此處では簡單に結論だけを述べてみやうと思ふ。<sup>(2)</sup>

一たい精神作用の本質は從來心理學に於て往々行はれるやうに宛も物的事象に對する如く是を外から眺めるだけでは到底正肯を得ることが出来ない。必ず内面からして眺めなければその本質を把握することは出来るものではないと

信ずる、從來普通に且つ常識的に感覺と表象とを區別するのに對應する客觀的刺戟の存否を以てせられる。然らずんば是を生理學的に見て、神經興奮が末梢器官から起つたか中樞器官から起つたかによつて區別されるのが常である。けれども是の如きは何れも表象を單に外面からして因果發生的に特徴づけただけであつて表象の體驗の本質は決して是で以て把握されてはゐない。感覺と表象とは像の鮮明の度が違ふとか強度が違ふことを擧げられるが是も亦た同様である。又、ヴェントは例へば意志に就いて主情的學說を主張したが其は意志過程はその經過形式から見れば情緒の經過形式と何等本質的の相違は無い。この理由からばかりでは無いが主として其故に意志過程は情緒の一種と見做すことが出来るといふのである。是は經過形式といふやうな形式的な、外面的な基準を以て精神作用の本質を捕へやうとしたものである。かかる仕方によつては到底意志の體驗の本質に觸れることは出来ないであらう。かやうな多くの心理學者の精神作用の見方よりも吾々は布伦ターノに於て始めて内面的な見方を見出すのである。布伦ターノは對象の志向的内在性を心的現象の物的現象に對する一の根本的標徴となし、この志向的内存の仕方に基いて心的現象を分類したのである。然しながら布伦ターノは表象を以て知覺作用を含めた廣義に解してゐるから狹義の表象作用の特性を考へはしなかつた。私はこの狹義の表象作用を内的に見てその本質を捕へやうとするのである。

表象體驗の本質は現實界から遊離して行く傾向に存するのではないかと私は現在考へてゐる。現實の環境、現實の自己を暫く忘れて是等から離れ去り現實的ならざる環境や自己をば現實として現前し體驗するのが表象體驗である。同時にこの體驗が感情、氣分を豊かに藏することも看過することが出来ない。而てその感情、氣分は概ね不快調ではなく快調を帯びるのが常である。夢の如きは極限的な非常態的な表象體驗であるが常態の中府の表象體驗はひとり藝術

享受に於てのみならず日常吾々が隨所に經驗する所である。表象體驗の本質を斯様なものであるとすれば是を一方では知覺、思惟、他面に於ては感情、意欲に對して本質的に對立させ、その特性を始めてよく認知することが出来るであらう。さてそれでは表象體驗の深淺は何を基準として云々することが出来るであらうか。吾々は是を表象内容が現實を隔る時間的並に空間的距離の大小に従つて是を判定することが出来るやう。尤も時には淺い表象體驗であるにも拘らず時間的空間的に現實から大なる距離に在る事態を表象することもある。けれどもやはり原則として表象内容の持つ現實からの遊離の大小に應じて表象體驗の深淺を認知することは不可能でない。してみれば表象の強い弱いは表象の明不明だけの問題ではなくその深淺の方向を伴ふ違ひであると解することが可能ではないかと思ふ。ここに於て始めて吾々は客觀的な刺激の量乃至は感覺の強度を基準とせずして表象的體驗そのものの了解からして即ち外面的ではなく内的に、表象作用の強さなる特性を生かして考へることが出来るではなからうか。

#### 註

- (1) Titchener, E. B., Lectures on the elementary psychology of feeling and attention, 1908, pp. 4-29.  
Titchener, E. B., A text-book of psychology. 1909, pp. 50-55.
- (2) Alma de Vries Schaub, On the intensity of images. Amer. J. of Psy. 22, 1911.
- (3) この年代は A Treatise of Human Nature の初版出版の時期である。
- (4) この順序は大體に於て特に表象の問題を論考した著作の發表された時期に従つてゐる。
- (5) Hume, D., A Treatise of Human Nature. Vol. 1. Everyman's Library Edition, p. 11.
- (6) Ward, J., Psychological Principles. 2. ed. 1920 p. 171.

Stout, G. F., *A Manual of Psychology*, 4. ed. 1929. pp. 136-140.

(7) Hume, D., o. c. p. 12.

(8) Hume, D., o. c. p. 13-15.

(9) Hume, D., o. c. p. 16.

(10) Hume, D., o. c. p. 17.

(11) Fechner, G. Th., *Elemente der Psychophysik*. II. 1860. S. 307.

Herbart, J. F., *Lehrbuch zur Psychologie*. 2. Aufl. 1834. S. 7.

ヘルバルトは表象が力 *Kräfte* として働くと考へたが、それはこゝに言ふ表象の強き *Stärke*, 又は強度 *Intensität* とは些か意味を異にする。ヘルバルトは「表象は相互に抗争する時には力になる。抗争するのは幾つかの表象が對抗的に遭遇する場合に起る。」表象はかゝる場合に力になるが「然しそれ自身としては決して力ではない。」と言つてゐる。尙ほヘルバルトの表象の概念は感應を包攝してゐることも看過してはならない。

(12) Galton, F., *Inquiries into Human Faculty and its Development*. 1883. Everyman's Library edition. p. 113.

(13) Stumpf, C., *Empfindung und Vorstellung*. Abhandlung der königl. preuss. Akademie der Wissenschaften. 1918. *Phil.-Hist. Klasse. Nr. 1. Einzelausgabe*, S. 20-21.

(14) Lotze, H., *Psychologische Untersuchungen I. Über die Stärke der Vorstellungen*. Kleine Schriften III. Bd., I. Abtheilung, 1891, Leipzig. S. 72-99. に收載。もとは *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, Neue Folge, Bd. 22, 1853 に掲載されたものである。

(15) Lotze, H., *Mikrokosmos. Ideen zur Naturgeschichte und Geschichte der Menschheit*. I. Bd., 4. Aufl. 1884. S. 228-231.

(16) Ziehen, Th., *Lehrbuch der physiologischen Psychologie* II. Aufl. 1920. S. 273-

(17) Stout, G. C., o. c. pp. 136-140.

- (18) Külpe, O., Vorlesungen über Psychologie. hrsg. von K. Bühler. 1920. S. 167-168.
- (19) James Mill, Analysis of the Phenomena of the Human Mind, edited with additional notes by John Stuart Mill. vol. 1. 1869, p. 65-
- (20) Wundt, W., Grundzüge der physiologischen Psychologie. 6. Aufl. Bd. 3. 1911. S. 451-455.  
Wundt, W., Grundzüge der physiol. psychol. 6. Aufl. Bd. I. 1908. S. 539.
- (21) G. E. Müller, Zur Analyse der Gedächtnisfähigkeit und des Vorstellungsverlaufs. III. Teil. 1913. S. 508.
- (22) Titchener, E. B., A Text-book of Psychology. 1923. p. 398.
- (23) Alna de Vries Schaub, o. c.
- (24) Wulff, F., Über die Veränderung von Vorstellungen (Gedächtnis und Gestalt.) Psychol. Forschung, I. 1922, S. 339.
- (25) Koffka, K., Zur Analyse der Vorstellungen und ihrer Gesetze. Leipzig. 1912. S. 193 195.
- (26) Stumpf, C., a. a. O.
- (27) Stumpf, C., a. a. O., S. 13-
- (28) Stumpf, C., a. a. O., S. 26-
- (29) Stumpf, C., a. a. O., S. 29-
- (30) Köhler, W., Über unbemerkte Empfindungen und Urteilsschätzungen. Z. Psychol. 66, 1913.  
Köhler, W., Gestalt Psychology. 1929. pp. 96-
- (31) Köhler, W., Psychologische Probleme. 1933. S. 59-  
G. E. Müller, Zur Psychophysik der Gesichtsempfindungen. Z. Psychol. 10, 1896. § 6. 例へば  
Titchener, Lectures on the elementary psychology of feeling and attention. 1908. pp. 10. に引用さるゝ
- (32) 直観像の體驗に就いて 昭和九年, 文化, 第一卷

主觀的視點的眞實像の根本問題 昭和十年、東北帝國大學法文學部十周年紀念哲學論集

表象の現はれ方に關する實驗的研究第三——意志を離れたる心的狀態に於る表象の現はれ方の研究——

昭和十年、心理學研究、第十卷

第三意識相に於ける再生 昭和十一年、文化、第三卷

Ohwaki, Y., Kaiwa, T. und Kaketa, K., Psychologisch-medizinische Untersuchung der eidetischen Anlage japanischer

Jugendlicher (1), 1934, (2), 1935, Tohoku Psychologica Folia, Tom II, IV.

Ohwaki, Y., Experimentelle Beiträge zur Lehre vom Vorstellungsvorlauf bei aufgabefreiem Bewusstsein (1), 1937, (11),

1938, Tohoku Psychologica Folia, IV, V.